

高知県大月町

尻貝遺跡



1991・3

高知県大月町教育委員会

正 誤 表

『尻貝遺跡』の報告書本文中に間違いがありました。
訂正して、お詫び申し上げます。

頁・行	誤	正
P14・23行	広い沈線のもの (19~31)	広い沈線のもの (19~23, 25~32)
P14・24行	描くもの (21~40)	描くもの (24, 36 ~40)
P14・25行	d類；口縁部及び胴部に	e類；口縁部及び胴部に
P14・27行	e類；弧線文、円形刺突文等に	d類；弧線文、円形刺突文等に
P14・27行	集約されるもの (41, 96)。	集約されるもの (41~45)。
P15・5行	No.21, 23のように	No.21, 22のように
P15・17行	No.41もc ₂ 類に含まれよう。	No.24もc ₂ 類に含まれよう。

発刊にあたり

1984年、宿毛市の釣人によって当遺跡が発見され、1989年9月、高知県教育委員会文化振興課のご尽力により試掘調査が実施されました。

私たちの町では1973年に弥生時代のムクリ山遺跡が発掘されて以来2回目の発掘となります。調査の結果、縄文土器片が約500点出土し、遙か3,500年前に人間の営みが当地に於いてなされていたことが判明し、感慨深いものがあります。

わずかな日数と狭い範囲の試掘ではありましたが、関係者の熱心なご尽力により、発掘規模以上の成果が得られたものと思います。私も当遺跡に向いたことがあります。波静かな小さな入江に臨み遺跡をはさんだ二つの谷川のせせらぎが聞こえ、野山からは野鳥のさえずりが聞こえてまいります。遺跡からは石斧が出土しましたが、石でたたいて形を整えた跡がはっきりと、つい昨日の仕事のように残っているのを見て、遥か昔の縄文人の営みがじのぼれ、ほのぼのとした気持ちになったものです。

この報告書は現在私達の町での最古の祖先の歴史をまとめあげたものです。関係者の皆さんの有意義な活用を期待いたします。

最後に執筆いただいた文化振興課の皆さん、調査に当りご協力いただいた土佐清水宮林署の方々、発掘をお手伝いいただいた町内の皆様にお礼を申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

陽溢りで石斧うつかや縄文人

1991年3月3日

大月町教育長 松田精泰

例　　言

目　　次

1. 本書は高知県幡多郡大月町周防形字尻貝山410番地に所在する「尻貝遺跡」の遺跡発掘調査報告書である。
2. 遺跡遺存状態把握のために大月町が町負担で発掘調査を実施したものである。
3. 調査は大月町教育委員会が主体となり、発掘調査は前田光雄（高知県教育委員会）が担当し、事務全般は浜田逸男（大月町教育委員会社会教育係長）が行った。
4. 発掘調査は平成元年9月25日から同年9月28日までの4日間である。調査面積は約12m²である。
5. 本書の編集・作成は大月町教育委員会が行い、報告書作成実務及び執筆は前田光雄が行い、「II 遺跡の地理的、歴史的環境」については廣田佳久（高知県教育委員会）、付編「ムクリ山遺跡」は岡本桂典（高知県文化財団）に執筆をお願いした。
6. 出土遺物の注記名は「O S 89」とし、昭和59年に採集された遺物については「O S 84」と新たに注記を施し、部分的に本報告書に掲載した。
7. 発掘調査参加者は次のとおりである。
武田 孝（大月町文化財調査会長）、宮崎幹男（大月町教育委員会）、大石寿郎、中野晴重、浜岡鶴松、浜岡花子。
8. 発掘調査から報告書作成に至る過程で次の方々及び諸機関に助言・協力を賜った。記して感謝したい。（敬称略）
岡本桂典、木村剛朗、廣田佳久、高知県清水営林署、高知県教育委員会

発刊にあたり

例　　言

目　　次

I 尻貝遺跡の所在地	1
II 遺跡の地理的、歴史的環境	2
III 調査について	4
IV 調査区について	5
A区	
C区	
B区	
V 遺物について	8
VI 繩文時代後期の土器について	17
VII おわりに	25
付編 ムクリ山遺跡	26



I 尻貝遺跡の所在地

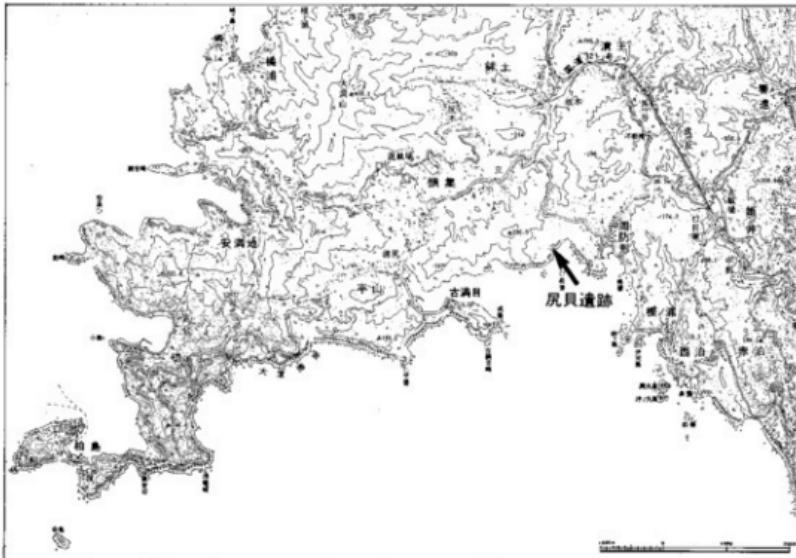
西南四国の縄文時代の遺跡の立地を考えた場合、豊後水道を臨む海岸・入江部及び四万十川等の河川沿いの平野・山間部に大きく分けることができる。その中でも特に海岸・入江部に所在する遺跡は西南四国の縄文時代を特徴付ける遺跡群となっている。古くから知られる平城貝塚、宿毛貝塚、片柏遺跡等の著名な遺跡も海岸・入江部に立地し、それぞれ西南四国の代表的な土器型式名の標式遺跡となっている。

これらの遺跡は縄文時代でも特に後期に属するものばかりで、豊後水道を隔てた九州及び瀬戸内地方との関連を考える上で重要な遺跡群となっている。

尻貝遺跡も豊後水道にせり出し入江が良く発達した高知県西端の大月町に所在し、大月町南側部の大月町周防形字尻貝山410番地の小入江に立地している。遺跡は汀線から僅か20m程奥まった山の緩傾斜面上に占地しており、昭和59年（1984）に波に洗われ崩落した断面から縄文土器が露出しているところを発見された。



第1図 大月町位置図



第2図 尻貝遺跡位置図

II 遺跡の地理的、歴史的環境

大月町は、高知県の西南端部に位置し、行政区画では幡多郡に属する。北を宿毛市、東を三原村と土佐清水市の2市1村と境を接する。面積103.01 km²、人口8,381人(平成3年2月末)を有し、海岸部を中心に雄大な自然が残り、足摺宇和海国立公園の秘境と称された大堂海岸、観音岩が存在する自然豊かな土地である。町は大きく23の部落からなっており、その中心が役場のある弘見である。弘見では、遺跡の立地に適する部分が多く見受けられるにもかかわらず、遺跡はほとんど確認されるに至っていない。これは、生活し得るに足る水を得ることのできる河川がないことに起因すると考えられる⁽¹⁾。このことは、大月町全体についても言えることである。ほぼ同じ平野面積を有する幡多郡大方町に比べると遺跡数は半数に満たないことも⁽²⁾、それによるところが大きいのではなかろうか。

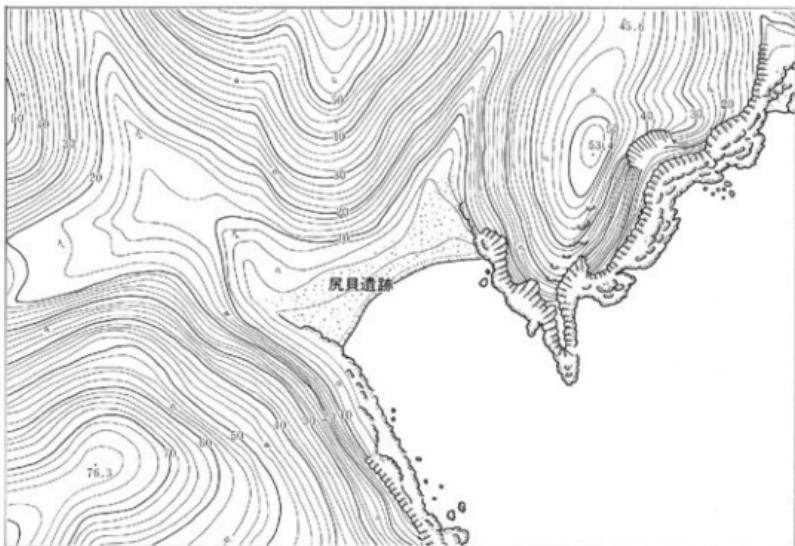
遺跡の分布をみた場合、海岸部と小さいなりにも河川のある添ノ川(弘見)と春遠に目立っており、ムクリ山遺跡のように立地的に例外的なものもあるが、遺跡の立地する標高約290 m山頂付近からは今でも湧水があり、その存在は首肯される。

これらの遺跡は縄文時代、弥生時代、室町時代、そして江戸時代に大きく区分することができ、古墳時代から平安時代にかけての遺跡は現段階のところ確認されていない。縄文時代の遺跡は、本報告の尻貝遺跡、ムクリ山遺跡、竜ヶ迫遺跡の3遺跡が確認されている。これらは海岸部に立地するかそれと密接な関連があるものであり、本遺跡のような立地は他にもあり今後新たに発見される余地は十分残っている。弥生時代ではムクリ山遺跡を挙げることができる。当該遺跡は所謂高地性集落に属する。室町時代中でも戦国時代に属する遺跡は大月町全遺跡の約67%を占め、中でも山城跡は多く19遺跡を数え、大半の部落に残存する。特に、添ノ川城跡を始めとして弘見城跡、内平城跡、春遠城跡、姫ノ井城跡、愛宕城跡、才角城跡等が良好な遺存状態を呈している。これらの中には本城とされるもので、屋敷跡等が付随すると考えられるが、実際確認されているのは添ノ川と春遠の数遺跡のみである。江戸時代に属するものは火立場跡(狼煙場跡)、砲台跡がある。これらは黒船の襲来に備えて、前者が高知までの連絡の手段として、後者が攻撃の手段として幕末に設置されたとされるもので、竜ヶ迫の白崎から海岸線沿いに大浦にかけて存在している。火立場跡は、石組みをなすものであるが、単に土坑状をなし、そこへ溝状の焚口を付属させたものも多くみうけられる。砲台跡は一般に設置部分(2×4 m)を石組みで囲ったものである。

以上、大月町の遺跡について概略したが、圧倒的に中世以降の遺跡が多い。換言すれば、中世以降集落が形成されるようになったといえるのではなかろうか。

(廣田佳久)

(註) 1、2 高知県教育委員会『高知県遺跡詳細分布調査概報一幡多ブロック一』昭和63年3月



第3図 周辺地形図



遺跡全景

III 調査について

尻貝遺跡は昭和59年（1984）に発見された縄文時代後期の遺跡である。発見されて以来、遺跡の断面から露出した土器片等が採集されているだけであり、考古学的調査は一度も行われておらず、遺跡の内容・性格等についてはほとんど知られていなかった。また海岸灘に立地している為、台風時には遺跡が波に侵食され、遺物等が流出する恐れがあるため、今後の保存・保全の資料に供するため大月町が遺存状態・範囲確認を目的として小規模発掘を行った。

遺跡は小尻目と呼ばれる入江にあり、現在も両脇の谷間からは水量豊富な沢が走り、一帯は高知県清水営林署の所轄の保有林となっている。調査は当初3ヶ所の試掘坑を設け、人力による掘削を行う予定であったが、現地踏査の結果、遺跡は後背の山から崩落した瓦礫により厚く被覆されており、重機の投入もできないことから試掘坑は1ヶ所だけとし、既に崩落した壁面部分の調査を集中的に行った。調査区名は東側部分の壁面をA区、中央部分をB区、山際のテラス部分の試掘坑（2×2 m）をC区と付名した。

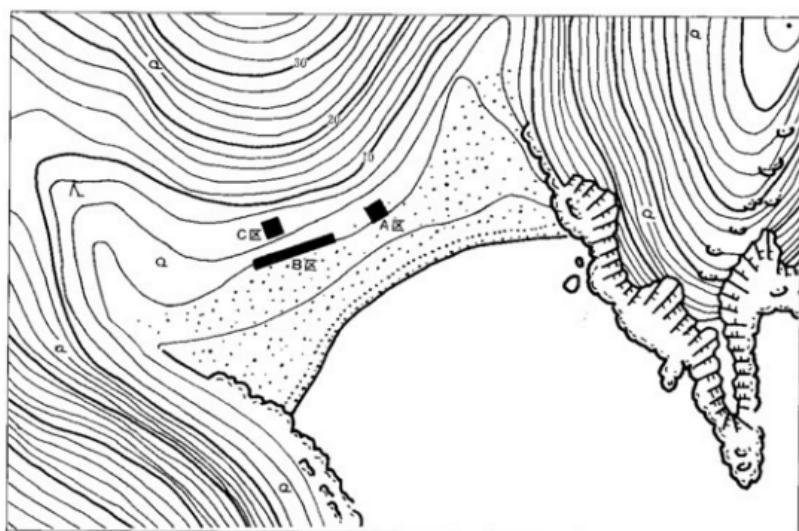
調査は平成元年9月25日から同年9月28日までの4日間である。

9月25日 B区の壁面調査。遺跡周辺の踏査。

9月26日 B区の壁面調査。A区の壁面掘削。

9月27日 B区の土層断面図作成。C区の掘り下げ。

9月28日 B区の土層断面図作成、遺物採り上げ。A・C区の土層柱状図作成。埋め戻し。



第4図 調査位置図

IV 調査区について

A区

調査対象の東側部分の壁面をA区と呼称した。周辺の踏査中にA区の壁面から第8図No.1の土器が露出しており、土層柱状図の作成を行った。

断面の精査を行ったが、遺物は先の土器片以外には出土せず、また構造らしきものも検出されなかった。1.4m程の厚さで疊層が堆積しており、山からの崩落瓦礫、海から打ち上げられた円礫の堆積下に土器片を出土した明褐色土が観察できた。しかし、その土層中にも小礫が多量に含まれており、再堆積の可能性の強いものであった。さらに下層には暗褐色土、明褐色土が続くもの



小礫を多量に含むことからやはり再堆積土と考えられる。出土した土器は縄文時代後期前半に属するものと考えられる。

- 1m	礫 層 径5~10cmの円礫
- 2m	礫 層 径1cmの角礫多量 角礫、崩落
- 3m	暗褐色土 径5cmの角礫多量 しまり・粘性なし・土器片出土
- 4m	明褐色風化火山灰層 径5cmの角礫少量

第5図 A区土層柱状図

C区

調査対象の山際のテラス部分に2×2mの試掘坑を設けた。断面調査以外に試掘坑を設けて掘削を行ったのはこの試掘坑1ヶ所だけである。暗褐色の表土層が30cm程堆積しており、その下層にはA区と同様に1m程山からの崩落瓦礫が堆積している。

表土下2.2mで層厚40cmの暗褐色土、表土下2.4mで明褐色土の遺物包含層が観察でき、共に小礫を多量に含んでいる。明褐色土は試掘坑が崩れる危険性があるため、30cm程確認して掘削を中止した。

出土遺物は土器細片が3点で、それも無文であり、時期決定は困難なもの、やはり縄文時代後期に属するものと考えられる。

構造も認められず、本区は遺跡の中心部より若干はずれるものと考えられる。

- 1m	表土層 暗褐色土
- 2m	礫 層 径10cm以下の破碎角礫 非變色砂質土少量混入
- 3m	明褐色土 径1cmの角礫多量 粘性ややあり、しまりなし
- 4m	暗褐色土 径5cm以下の礫多量 やや砂質、しまりなし 土器細片出土
- 5m	明褐色土 径1cm以下及び10cmの 礫多量、粘性ややあり、 しまりなし、土器細片出土

第6図 C区土層柱状図

B区

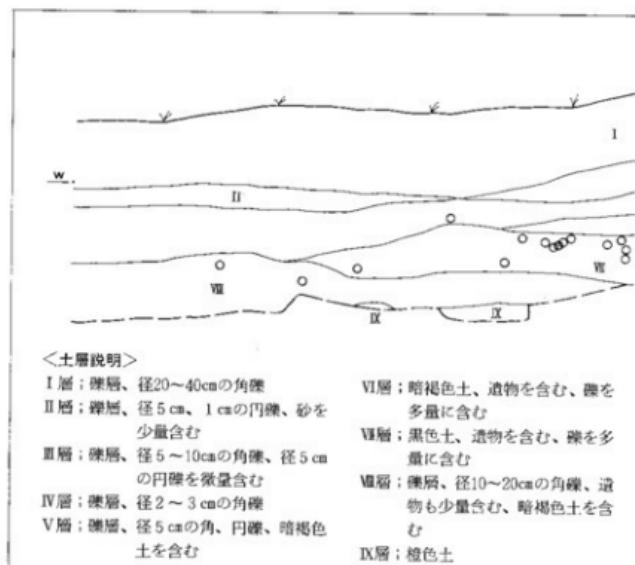
調査対象中央の南壁面約12m部分の調査を行った。山際から海方向にテラスが広がっていたものが、波の侵食を受けテラス部分が切り崩されており、壁面の崩落土の除去を行い土層断面図を作成した。断面に露出した遺物については土層断面図にドットで記入し、採り上げを行った。

崖面の高さは約2.2mを測り、山からの崩落礫で1.5m程度く被覆され、VI・VII層の遺物包含層中にも礫は多量に混入し、継続的に山からの崩落礫が堆積していたものと考えられる。

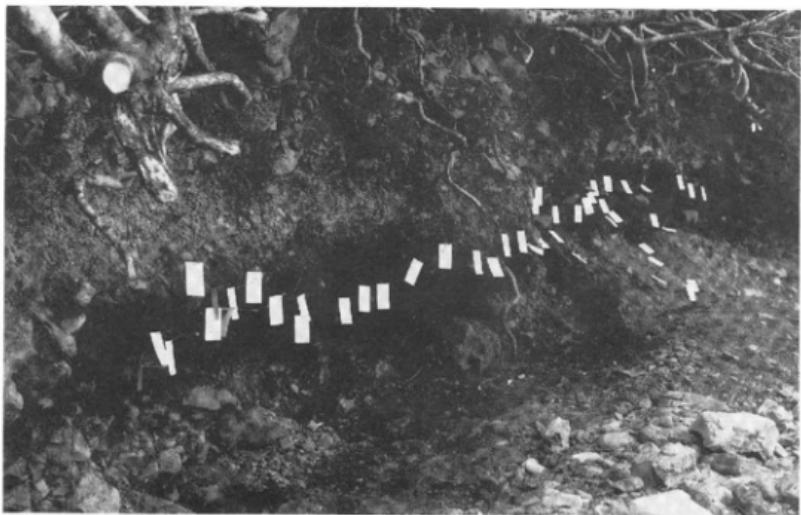
遺物は主にVI層（暗褐色土）、VII層（黒色土）に含まれており、共に礫を多量に含む。VI層の厚さは50~60cmで、VI層上層部分に比較的の遺物の纏まりが認められた。VII層も約50cmの厚さを測り、基本的にはVI層と同一と考えられるものの、色調が黒味を増している。西側部分ではVII層は消滅すると共に、遺物量も減る。VII層の礫層中にも遺物が僅かに認められるものの混入と考えられる。

崖面の土層堆積状況から観察するに地形は東から西にかけて傾斜をみており、東端と西のVII層の収束する部分との比高差は1.1mを測り、大きく傾斜していることを示している。

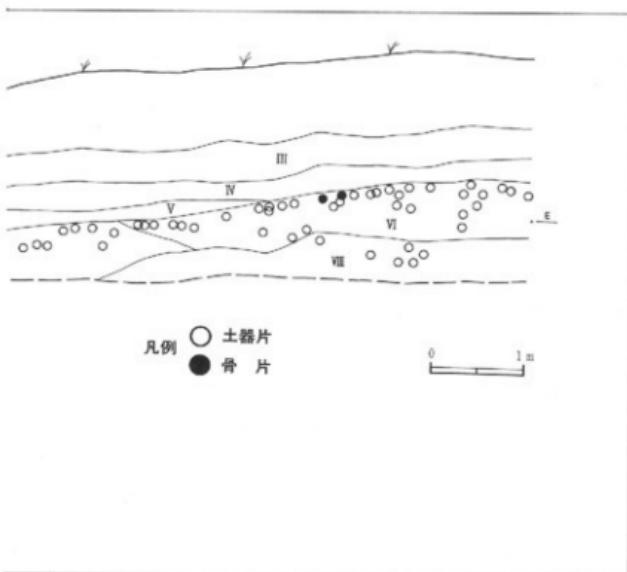
出土遺物は主に縄文時代後期前半の土器片で占められ、僅かにVI層中で白色小骨片が出土したのみである。遺構等は断面からは観察されなかったものの、本区が尻貝遺跡の中心部をなしていたものと考えられる。



第7図 B区土層断面・遺物出土図



B区 土層断面及び遺物出土状況



V 遺物について

本遺跡から出土した遺物は、大部分が縄文土器でそれも完形もしくはそれに近いものは1点も出土しておらず、破片ばかりであった。今回の調査で縄文土器片約500点、弥生時代から古墳時代にかけての高杯、甕、製塙土器と考えられる破片がそれぞれ1点ずつ出土しており、また石器としては縄文時代の打製石斧が1点出土している。

出土区はNo.1がA区で、No.3、22、24、39、52、98の6点については1984年の本遺跡発見時に採集されたもので、それ以外の他のものについては全てB区からの出土である。

縄文土器（第8～11図No.1～104）

No.1から9は沈線文の口縁部破片である。No.1、2は楕状把手を持ち、No.1には把手部分に沈線による渦巻き状の入り組み文を施すが、No.2には施されていない。共にまた把手部分の口縁部上端には瘤状の小突起を有し、突起部分は沈線による雷状入組文を表出している。口縁部は「く」状に外に拡張し、口縁端部は段状になる。No.1は頸部に沈線を1条巡らし、胴部には斜行沈線を施すが末端部が入り組み文になるものと思われる。No.3～6は把手を持たない代わりに突起下の頸部には綴位の沈線を施す。口縁端部には沈線が1条巡り、No.3、4は口縁部外にも沈線を巡らしている。No.3の胴部には幅広の平行沈線を施す。No.1から6までの口縁部破片は突起部分に文様の集約化が認められる。No.7は口縁端部に沈線が1条巡ることからNo.3～6と同様のものと考えられる。No.8は口縁部が肥厚しないものの口縁端部に浅い沈線を巡らしている。No.9は沈線による入り組み文を施す。頸部は丸味を持って内轉し、口縁部は肥厚しない。頸部から口縁部に文様が集約され胴部下半は無文になるものと考えられ、鉢になる可能性が強く研磨かナデによる丁寧な仕上げである。

No.10から18は沈線文の胴部破片である。幅広い平行沈線か斜行沈線か数条巡る。No.10、18のようにな長楕円になるものも認められる。No.18は鉢の可能性があり、No.9と同様の丁寧な仕上げである。

No.19から35は磨消縄文である。No.19、20は口縁部破片である。No.19は口縁を外方向に拡張し口縁端部が段状になり、外面に沈線を1条巡らす。沈線下に僅かに縄文がみられる。No.20は瘤状の小突起を有し、沈線による略渦巻きを施す。口縁端部には短沈線による刻みを施し、外面には縄文がみられる。No.21は沈線を1条巡らしその下に原体R Lの縄文を施し、頸部は無文帶となっている。外面を比較的丁寧にナデで仕上げている。色調は褐色及び赤褐色を呈する。No.22も口縁部外面に沈線を1条巡らせ沈線下に原体は不明だが縄文を施す。内面は口縁部を若干巻き込む様に仕上げる。頸部は無文で内轉気味である。頸部と胴部の境には沈線を施すものと思われ、内外面共にナデを施す。

No.23から35までは磨消縄文の胴部破片である。No.23から32の沈線は5～8mmと幅の広いもので、No.23、No.25～27には沈線による長楕円の区画がみられ、原体はR Lである。No.24は胴部破片で鈎状の入り組み文を施す。No.32は方形状の区画を沈線で施す。No.33から35は幅の狭い沈線で方形・長楕

円の区画がみられ、器肉も先のものに較べ薄い。

No36は疑縄文と考えられる。No37は縦位の沈線により区画が施され、原体はR Lである。No38は横位の沈線下に縄文を施した後、棒状工具により粗い斜行沈線を数本押し曳きする。

No39は縄文地に直接沈線を施したもので、頸部から口縁部にかけて僅かに屈曲し、口縁部は肥厚せずに直線的に立ち上がる。口縁外面に2条の沈線を巡らせ、頸部は無文帯を形成せずに縄文地に逆U字状の沈線を施している。No40は口縁部外面に沈線を巡らしたもので、口縁部に縄文を施した後に2本沈線を巡らし頸部は無文帯となっている。

No41から45は口縁部に刺突等の文様が集約し、波状を呈する口縁部破片である。No41から43は弧状の短沈線が口縫波頂部に描かれており、No43は左右の弧線文の中央に円形刺突を施し、また原体R Lの縄文を口縁部に施す。No44は波頂部に円形刺突を施し、両脇に直線的な沈線を1条巡らせる。内面にもクランク状の沈線を巡らせている。No45は弧線文状の短沈線と円形刺突を施し、内面にはやや幅の広く浅い沈線を1条巡らせており、浅鉢と考えられる。

No46は沈線のみでNo47は口縁部と頸部との境に幅の広い沈線のみで区画し他は無文である。

No48は沈線文土器であるが、No 1から18の沈線文土器とは違い、沈線は比較的浅くやや趣を異にしている。鉢になる可能性が強く、口縁部外面に沈線を巡らせ口縫をくびらせ、内外面共にナデを施す。No49は口縁部を外に拡張し無文で内面には沈線を2条巡らせる。No50は鉢の口縁部と考えられ、外面に2本沈線を巡らし、沈線間に原体R Lの縄文を施す。また補修孔を内外面から穿孔している。No51は口縁部外面のみに沈線を1条巡らせた鉢である。全体的に器形は丸味を持ち、内外面共に研磨し丁寧に仕上げている。

No52から75は口縁部に縄文を施した一群である。中でもNo70から75は内外面共に縄文を施したものである。頸部は無文帯を形成し、外彌する。胴部は全縄文である。

No52から69までは口縁部外面のみに縄文を施したもので、口縁部の断面形態に若干の相違が認められる。No52から63は端部が尖る三角形を呈し、No64は口縫端を外傾させている。No65～68は口縫端部が平らなもので、中でもNo68は器肉が厚く、No67は口縁部はやや丸味を持つ。No69は口縫部に丸味を持つものである。縄文原体はNo67が摩耗して判然としないが疑縄文、No63は無節L 1、他のものはR Lと考えられる。

No70から75までは口縁部内外面共に縄文を施したもので口縫端部は平滑である。No70の原体はR L、No71は無節L 1、No72はR Lで内面は箒ナデを行う。No73はR Lで内面の縄文帯は幅が広い。No74、75は口縫内外面共に疑縄文で口縫部を肥厚させている。

No76から100は胴部破片である。No76から91は縄文、No92は疑縄文、No93から100は条痕文である。

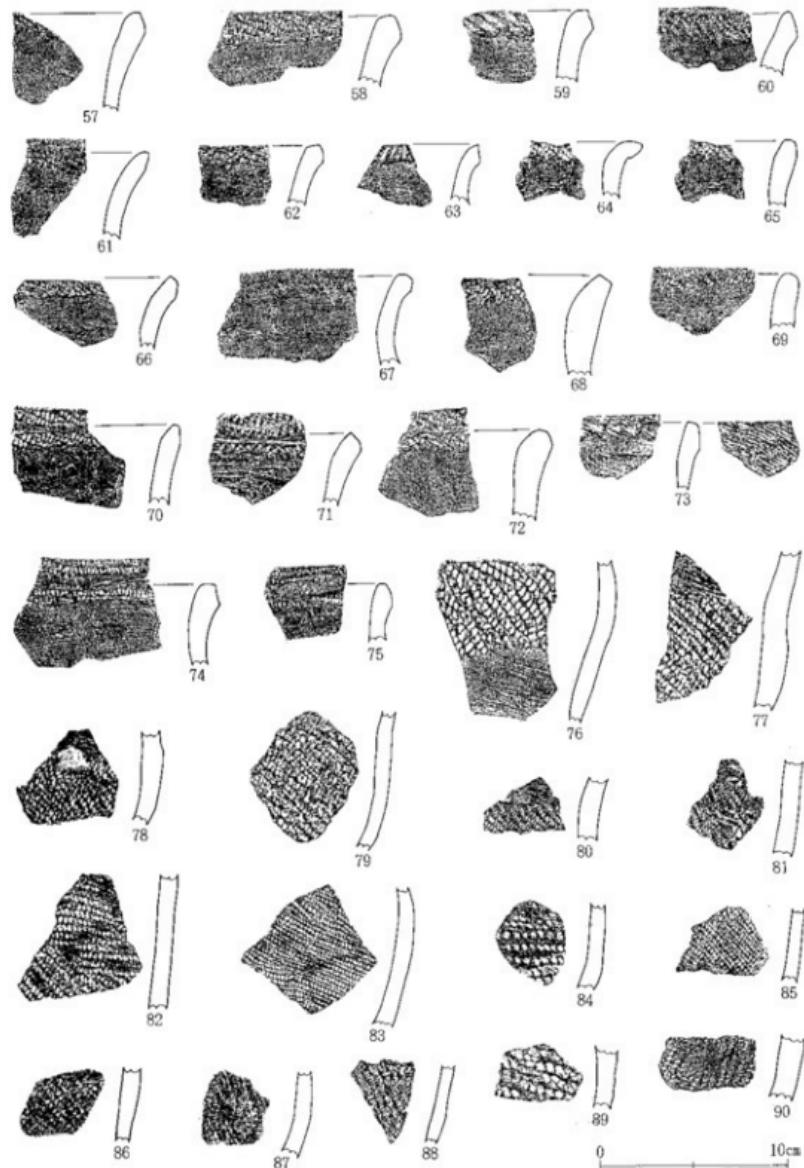
No76から81は無文帯がみられる。No87、88の内面調整は条痕である。縄文原体は全てR Lである。No92は疑縄文に幅が狭く浅い沈線を施している。No93から100は条痕文で、No94、97、98は内面に



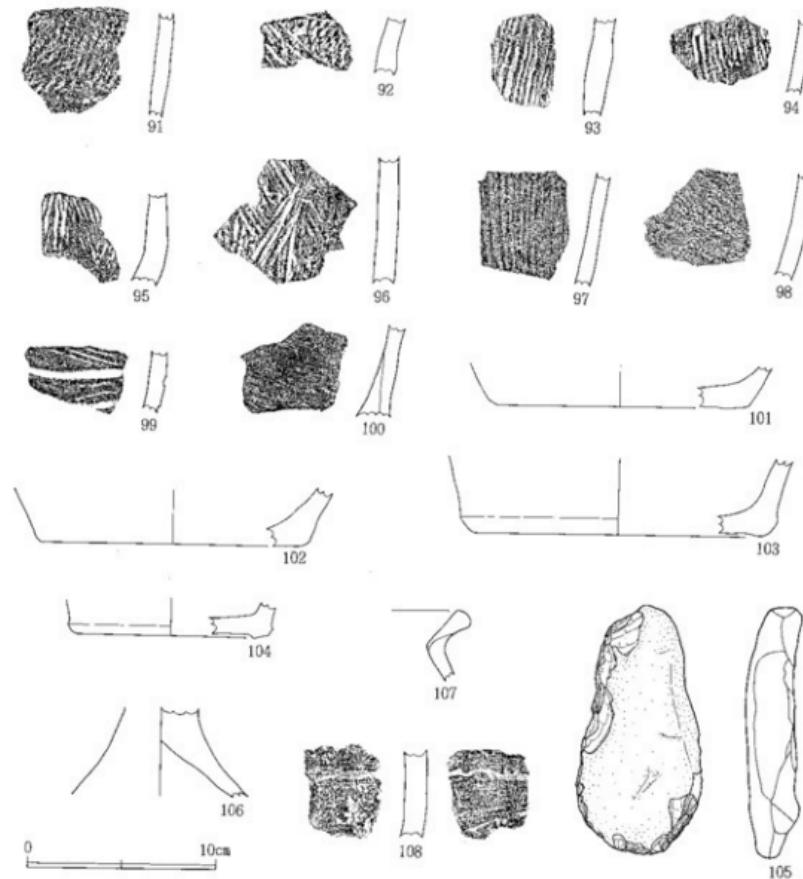
第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)



第10圖 出土遺物(3)



第11図 出土遺物(4)

も横位の条痕を施す。No.99は沈線文も施している。

No.101から104は底部破片である。No.101及び102は平底で、No.103及び104はやや上げ底気味で底部外縁はヘラケズリを施している。底径はNo.101が13.2cm、No.102が13.8cm、No.103が15.4cm、No.104が10.5cmを測る。

胎土は全体的に砂粒を多く含み粗く、色調は主に褐色から暗褐色を呈している。No.41から45まで白色鉱物粒を多量に含み粗い。中でもNo.42は大粒の白色鉱物粒を多量に含んでいる。またNo.103、104の底部も白色鉱物粒を多く含んでいる。

石 器（第11図No.105）

No.105の打製石斧が1点出土している。全長13.3cm、最大幅6.6cm、最大厚2.7cmを測り撥型を呈する。石質は砂岩である。撥型の自然石を利用し、表裏面共に自然面を多く残しており、左側面、基部を僅かに調整加工を行い、また刃部の裏面を敲打し刃部を作出している。

その他の遺物（第11図No.106～108）

No.106は高环の脚部である。脚部は大きく開いている。胎土は砂粒を少量含み堅緻である。

No.107は土師器甕の口縁部破片である。「く」字状に口縁部は屈曲し、整形は外面がナデ、内面はナデ及び箇ナデである。胎土は砂粒・白色鉱物粒を含みやや粗く、色調は赤褐色を呈する。

No.108は製塙土器と考えられる。内面に布压痕がみられ、器肉は1cmを測る。胎土は大粒の砂粒を少量含みやや粗く、色調は褐色を呈する。

縄文土器の分類

本遺跡出土の縄文土器は後期前葉から中葉に特定できよう。以下のa類からe類まで大きく5類に概ね分類できる。

a類；沈線文でNo.1から18までがこの類に含まれる。波頂部に瘤状の突起に雷状の入り組み文を描出し、その下には橋状把手を持つもの（1、2）、橋状把手を持たないもの（3、4、6）が認められる。

b類；磨消縄文で幅の広い沈線のもの（19～31）、幅の狭い沈線のもの（33～35）が認められる。

c類；縄文地に直接沈線を描くもの（21～40）。

d類；口縁部及び胴部に縄文を施文し、頸部が無文となるもの（52～75）。口縁部外面のみに縄文を施文したもの（52～69）、口縁部内外面に縄文を施文したもの（70～75）の大きく2細分できる。

e類；弧線文、円形刺突等による文様描出が口縁部に集約されるもの（41、96）。

a類については、高知県西部では土佐清水市の片柏遺跡（岡本健児⁴⁶ 1975）で数点認められ、報告書で平城式b類としたものが本類と類似したものと考えられる。片柏遺跡出土のものは細片が多く、口縁部形態の分かるものは出土しておらず、本遺跡のものとの比較対照は困難ではあるが、沈線による渦巻きを描くものが1点出土しており、それは渦巻き先端部が繋がっており、本遺跡での渦巻きは先端部が離れ入り組み文化しており、若干の相違点が認められる。本遺跡の沈線文土器は肥厚した口縁部が短く強く外反し、口縁端部は段か沈線状になり、胴部は直線的に立ち上がる。

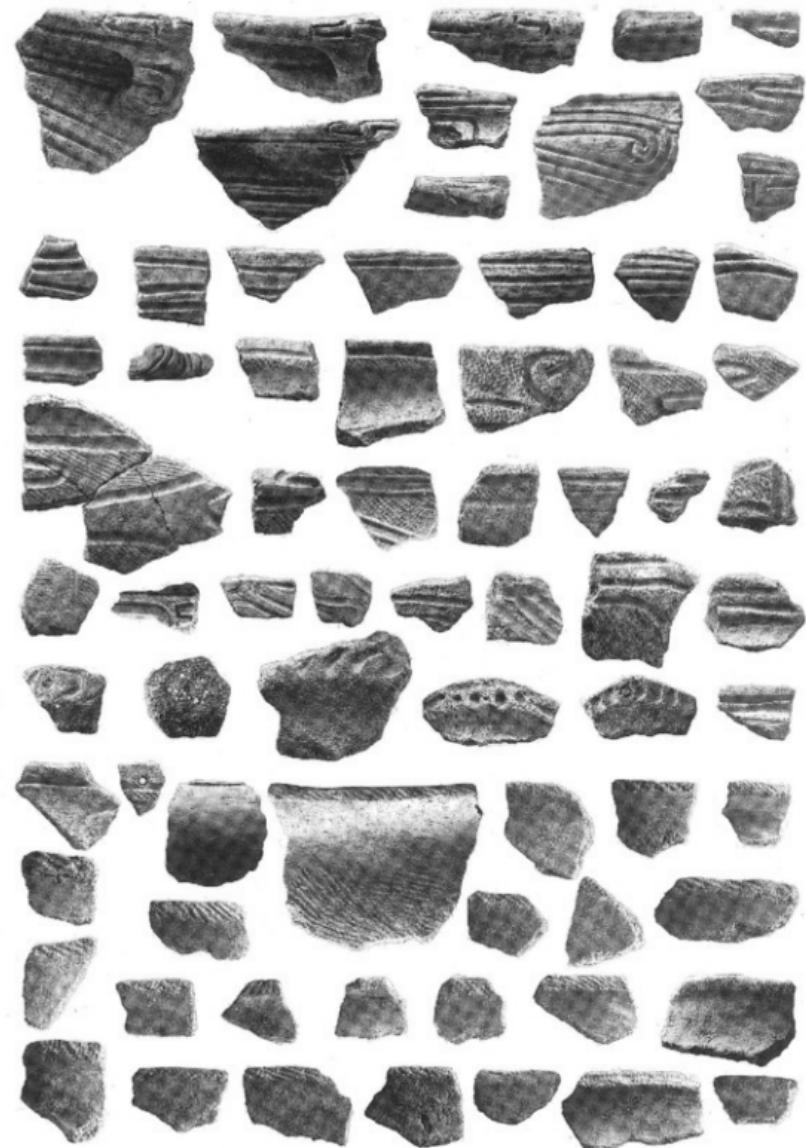
が特徴である（a₁類）。中にはNo.8のように口縁部は肥厚せず、直線的に立ち上がるるものも認められるものの（a₂類）、その以外のものについては、大分県小池原貝塚出土（賀川光夫⁹、1967）のものにより近い形態を示しているものと考えられる。

b類の磨消繩文土器についても、a類と同様の口縁部形態を呈するNo.19、20が認められ、口縁部は肥厚し強く外反するものである（b₁類）。No.21、23のように口縁部が肥厚せずに直線的に立ち上がり、口縁部外面に沈線を1条巡らせ、沈線下に繩文帯を設けるものも僅かに認められる（b₂類）。b₁類に類似したものとしては高知県では片柏遺跡の平城式a類としたものに1点あり、それも口縁部が外反するものの橋状把手がつくものであり本遺跡とは相違が認められる。片柏遺跡出土のものについては、口縁部が直線的に立ち上がり沈線と繩文を巡らせたもので、本遺跡のb₂類に相当するもので占められる。この他高知県では宿毛貝塚、広瀬遺跡、また愛媛県御荘町平城貝塚に於いてもb₂類が主体を占めるものと考えられる。小池原貝塚に於いては平城貝塚とは逆にb₁類が主流を占め、若干b₂類の出土も認められる。このことは先のa類についても同様のことと言え、小池原貝塚でもa₁類が主体的である。

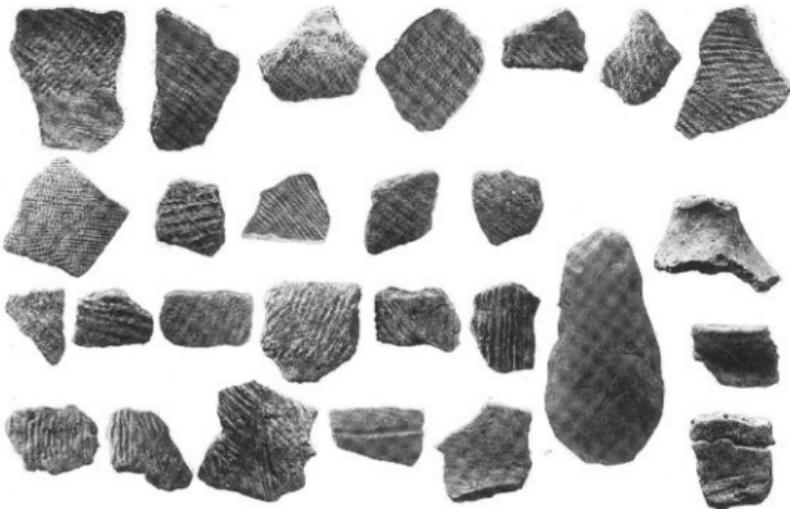
c類については繩文地に直接沈線を描くもので、口縁部が直線的に立ち上がり、繩文を施した後に沈線を2条巡らせ、頸部は無文帯を形成せず繩文と沈線を施すNo.39のもの（c₁類）、直線的に立ち上がる口縁部に繩文を施した後2条の沈線を横走させ、頸部無文帯を形成するNo.40のもの（c₂類）の2種類認められる。No.41もc₂類に含まれよう。c₁類の口縁部はやや内彎気味であり、c₂類の口縁部はやや外彎気味である。口縁部破片で全体像を掴むことはできないが、c₁類は平城式第2群a類（木村剛朗¹⁰、1982）、c₂類については平城式第2群b類（木村剛朗¹⁰、1982）おそらく相当するものと考えられる。周辺遺跡ではc₁類は平城貝塚、c₂類は中村市三里遺跡（岡本健児¹¹、1978）、国見遺跡、片柏遺跡に類例が求められる。

d類は弧線文と円形刺突文を口縁部の波頂部分に集約させたもので、No.43の大振りな弧線文を左右に対置するものと思われる。No.44、45は円形刺突を施し、No.44は沈線を1条巡らしており、また内面にもクランク状の短沈線を施している。

e類は口縁部外面のみ繩文を施したもの（e₁類）、口縁部内外面共に繩文を施したもの（e₂類）に大きく分類することができる。e₁類は平城貝塚、e₂類は片柏遺跡でそれぞれ比較的多く出土している。



遺物写真(1) S = 1/3



遺物写真(2) S = 1/2

VI 繩文時代後期の土器について

西南四国の縄文後期の遺跡をみてみると、愛媛県御荘町平城貝塚、高知県宿毛市宿毛貝塚は明治になって寺石正路の発見により、その名は古くから知られていた。共に貝塚であることから学会でも注目されており、1938年（昭和13年）に三森定男¹⁾により、いち早く宿毛貝塚出土土器は縁帶土器であるとされた。その後、宿毛貝塚は1949年（昭和24年）に高知県教育委員会により発掘調査が実施され、1951年（昭和26年）には報告書の刊行を行っている。また1957年（昭和32年）7月27日には国史跡となっている。平城貝塚も1957年には愛媛県南宇和郡御荘町教育委員会により報告書を刊行されている。

西南四国を代表する平城貝塚と宿毛貝塚は、縄文後期というほぼ同時期の遺跡ではあるが、その遺跡のあり様は対称的であり、平城貝塚は九州の鐘崎式と宿毛貝塚は瀬戸内の津雲A式との関連で取り上げられてきた²⁾。つまり、西南四国に於いては九州の影響と瀬戸内の影響が相まって、西南四国の独自の縄文文化が成立していることが早くから認識されていた。

宿毛貝塚・平城貝塚以外にも土佐清水市の砂丘上に立地する片粕遺跡、四万十川下流域の三里遺跡、愛媛県側では芋坂遺跡、岩谷遺跡等の縄文時代後期の遺跡が多く分布している。片粕遺跡、三里遺跡は宿毛貝塚・平城貝塚と同様に西南四国の縄文後期前葉から中葉までの標式遺跡となってお

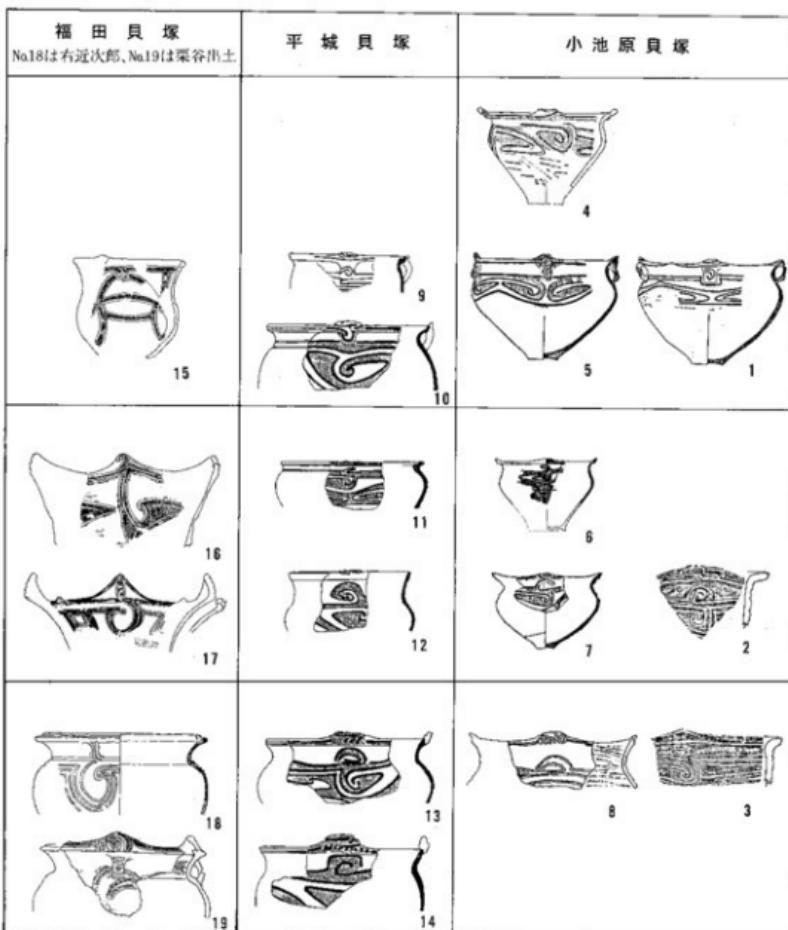
り、宿毛Ⅰ式→宿毛Ⅱ式→平城Ⅰ式→平城Ⅱ・三里式→片船式の変遷が考えられている(木村1982)。宿毛Ⅰ・Ⅱ式については福田KⅡ式に、平城Ⅰ式は小池原上層式に、平城Ⅱ式が彦崎KⅠ・津雲A式に他の地域との並行関係にあるものと考えられている。しかし、福田KⅡ式と縄文土器を繋ぐ「中間型式」が新たに認識され、それも比較的広域に分布することが判明し始め、「中間型式」の編年的位置付けにより西南四国の縄文後期も全体の再考が必要となっている。ここでは平城Ⅰ式を中心取り上げ、その文様構成・諸属性から九州及び瀬戸内との関係に触れ、平城式の編年的位置付けを検討してみたい。

平城系と小池原系について

尻貝遺跡出土土器については平城Ⅰ・Ⅱ式に相当するものと考えられるが、尻貝遺跡a₁・b₁類について西健一郎氏³⁾の分類の第1類2—A、A'、B、B'に相当し、小池原系と捉えられているものである。同じく尻貝遺跡a₂、b₂類は第1類1—A、A'、B、B'の平城系に相当するものである。この場合の平城系は平城Ⅰ式、小池原系は小池原上層式を指している。第12図は平城貝塚(No 9~14)と小池原貝塚出土土器(No 1~8)を対比して並べた。平城貝塚及び小池原貝塚共に磨消し縄文は多いものの、しかし小池原貝塚では沈線文系土器が比較的多く、平城貝塚に於いては沈線文系土器はごく僅かで主体は磨消し縄文土器であると言う相違点が認められ、これは時期的差異ではなく地域的な相違に基づくものであろう。

平城Ⅰ式と小池原上層式の文様構成について

第12図No 1、5に観られるように瘤状突起に渦巻き状入り組み文を施し、橋状把手上の渦巻き状入り組み文はまだ乱れておらず、胴部文様は橋状把手下で三角形状の楕円区画文か端部が離れ入り組み文化する横長「J」字状モチーフを対置する。このタイプのものは山鹿貝塚にも認められる。No 11は橋状把手は消失し、頭部の鈎状モチーフに置換する。頭部は頭部鈎状モチーフ下に縄文施文部分の横長「J」字状モチーフを横位に懸垂させる。頭部第2文様帶にはNo 1と同様の第1文様帶を残存させている。No 2の沈線文系土器についても同様のことが言えよう。但し沈線文系土器の瘤状突起は雷文状の入り組みが主流となり、これは後続の鐘式土器に引き継がれる。No 10は横長「J」字状モチーフを磨消し、逆に渦巻き入り組み文に縄文を施文する反転現象を見せているが、No 11と同様の第1文様帶を形成している。No 7の頭部の鈎状モチーフが大振り化し波頭状に転化する。頭部第1文様帶の横位の横長「J」字状モチーフは頭部波頭状モチーフ下からずれる傾向を示し、No 8、12、13の形態に変移する。No 12は瘤状突起の外側に短沈線を施す、新しい口縁部形態に変移する過程のものである。しかし、頭部及び胴部については旧態の文様構成を採用している。No 13は瘤状突起下の口縁部外面に短沈線から弧線文に変移し、その数も多くなる。頭部文様は更に大振りなものへと変移する。



第12図 平城I式の文様変化(縮尺不同)

平城I式と小池原上層式の細分について

平城貝塚と小池原貝塚は豊後水道を隔てながらも、同様の変遷過程を辿るものである。土器の文様構成の諸属性は急激な変化は避けないものの、つまり近接する諸段階では諸属性も新旧のものが併存し、その変移把握は困難ではあるがNo.1、5の古相段階とNo.8、14の新相段階を比較した場合、

その差異は明確であり諸属性の緩やかな変移が総体としての文様構成の大きな変換を惹起している。磨消し繩文系土器の新相段階では瘤状突起下に弧線文を付加し、橋状把手を喪失すると共に大振りな波頭状モチーフに置換する。胴部文様は対置文から崩れを起こし、横長「J」字状モチーフを主文様として頸部波頭状渦巻き文の下に横位に懸垂されていたものが、流動的なものへと変容するようである。器形もまた文様変化に呼応するように頸部が大きくくびれるものから緩やかなものに推移する。これは賀川光夫氏⁴⁾の小池原上層式の変遷觀及び層位にも合致するものであり、また木村剛朝氏⁵⁾の頸部文様変遷観も首肯されるものである。

沈線文系土器については磨消し繩文系土器と同様の変遷過程を経るもの、頸部がくびれずに直立し、それと共に磨消し繩文系土器に觀られたような波頭状モチーフは逆に小振り化し消滅の過程をたどるようである。沈線文系土器は繩文を施文しないことと新相段階では胴部文様は渦巻き文により施文効果を上げる方向に向かう。更に瘤状突起は磨消し繩文系土器に觀られた弧線文を採用せずに、雷状入り組み文に短沈線を付加することにより、沈線文系土器は新相段階で磨消し繩文系土器と袂を分かつ兆しを觀せる。

平城I式では各部位の変遷は、瘤状突起は渦巻きから弧線文へ、橋状把手は大振りな波頭状渦巻きへと漸移的に置換されていく。瘤状突起（口縁部）、橋状把手（頸部）、横位の横長「J」字状モチーフ（胴部）と言う文様集約部は古相段階から新相段階まで規範を守って継承されていく。各部位の文様は別のものに置換されると言う現象は見られるものの、各部位の文様と言う規範は容易に解消されることなく、平城式は置換現象と言う行為により文様構成は変遷していく。決して「押し上げ」・「移転」・「輪廻」と言う現象では捉えようもない⁶⁾。

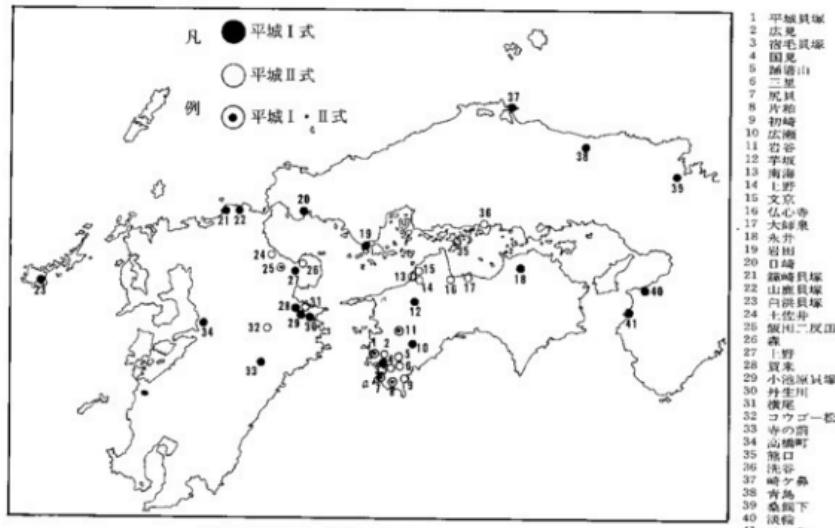
平城II式について

平城I式に後続する平城II式は、肥厚した口縁部は直立し、口縁部外面に繩文を施した後、波頂部分の外面に沈線による弧線文か同心円文を施し文様集約部を作出している。文様集約部間を沈線による鈎状モチーフか楕円区画を施す。平城I式に觀られた口縁部の短沈線は弧線文に変化し、文様集約部を繋ぐ沈線の末端部は平城II式の段階に至り鈎状に曲がる傾向を示し、楕円区画へと変移する。

頸部は平城I式から引き続き大振りな波頭状モチーフから口縁部の文様集約部から垂下する複合沈線となる。胴部は繩文を施した後、複合沈線により曲線文を描く。また、胴部にも同心円文を描くものも出現する。平城I式に觀られた様に横長「J」字状モチーフは一部残るものも認められるが、新相段階のものは曲線文に解消される。

平城式の分布について

西南四国に於いて主体的に平城式を出土する遺跡は限られており、本遺跡と平城貝塚に限られる



第13図 平城式（小池原上層式）の分布

様である。本遺跡は立地が狭隘である為、相対的に出土量は少なく、他の遺跡でも同様に客体的である。平城貝塚の所在する御莊町から以北の佐田岬を経て松山市に至る海岸部分は現在のところ踏査が行き届いていない為か判然としない。九州側に目を転じてみると海岸沿いを中心に東九州に集中が認められ、国東半島の周防灘に面した地域に土佐井、上野、森、飯田二反田、佐賀関の別府湾に面した地域には小池原、横尾、丹生川、賀来遺跡を挙げることができる。小池原貝塚では平城I式のみであり、平城II式にまで展開が観られていない。熊本県の高橋町遺跡、福岡県の鐘崎、山鹿貝塚に平城I式が客体的に認められる程度で、西九州及び北九州側には鐘崎式が展開する様である。鐘崎式と平城式は胴部文様は共有するものの、平城式に観られたような瘤状突起を有せず刻みを施す点が違う程度で、その峻別は困難である。平城II式の段階では明らかに鐘崎式は地域性を顕在化させ、平城II式は津雲A式の影響を強く受け、西南四国及び瀬戸内側に多く認められる様になり、東九州と内陸部のコウゴー松、寺の前遺跡に平城II式が僅かに認められる程度である。

平城I式及び平城II式の編年的位置付けについて

従来、平城I式は宿毛II式を継承し、小池原上層式は小池原下層式の発展したものと捉えられている（木村1982）。宿毛式は福田KII式に並行するという編年觀（西1980、木村1983）と2本沈線の宿毛式が3本沈線の福田KII式に先行するという見解がある（今村1977、泉・玉田1986、千葉1987、

玉田1989)。前者の編年觀では平城I式は瀬戸内との並行型式は提示されていないものの、平城II式が津雲A式に並行するとの編年觀を取る(木村1983)。後者の編年觀の中で玉田芳英氏は平城I式を福田K II式と縁帶文土器との「中間型式」に並行関係を求めており。田中良之・松永幸男(1984)はそれより新しく寺の前遺跡出土の折衷土器からして彦崎K I式との並行を考えている。

これらの編年觀では、平城I式の編年の位置付けは、小池原上層式(鐘崎I式)と並行関係にあり、平城II式がそれに後続するという点に関しては共通の認識はもたれているといえよう。しかし、では果たして瀬戸内との編年関係となると、現時点では充分な答えは用意されていない様に思われる。そういう複雑な状況の中で平城I式とII式の先後関係を逆転させた編年觀(西脇1990、宮本1990)も提示されており、これは研究者間相互の平城式に対する認識のずれと、また彦崎K I式と津雲A式との編年の位置付けの認識に起因しているものと思われる。

宿毛式についても単純に福田K II式と並行関係若しくは先後関係にあるとは捉えられず、玉田芳英氏の見解の様に2本沈線の磨消し縄文が西部瀬戸内では福田K II式に並行する部分もあるものと考えられる。福田K II式は今の研究段階では3細分される方向に向かっており(千葉1990)、宿毛式も更に再細分の検討を要し、その上で福田K II式との並行関係若しくは先後関係を再点検する必要性があろう。

平城式を理解する上で糸口は瀬戸内及び九州、西南四国の3地域の独自性を見極め、更にその共通項を抽出する必要性があろうかと思われる。小池原上層式に於いても第12図No.4は小池原貝塚の貝層下部より出土したものであり、同様に下部から第12図No.2、8の新段階のものが主体ではあるものの、No.4は胴部に横長「J」字状モチーフを繰り返し、縄文帯も幅広であることから小池原上層式の古相段階の中でも最も古く位置付けられるものである。平城I式については称名寺I式・中津II式段階で観られた縦長「J」字状モチーフの展開と同様の文様構成をとること、また中津II式から福田K II式の古段階で渦巻き文の末端部が離れ入り組み文化する点、更に第12図No.10に観られる様な横長「J」字状モチーフの反転現象等々の属性の継承・伝播が認められる。

従来、平城I式の中段階に於いて、入り組み渦巻き文と捉えられていた胴部の文様は「J」字状文が横長化したものと解釈でき、末端部が離れることにより入り組み文化したものと捉えられ、福田K II式に於いても第12図No.16、17も同様に縦長の「J」字状文の変形と解釈でき、また末端部が離れる事も平城I式と同様と考えられる。こうした諸属性は西日本の後期前葉に比定されるものであり、縁帶文土器化する以前の具象と捉えられよう。中津式と称名寺I式が比較的影響し合っているにもかかわらず、福田K II式と称名寺II式の段階に至りその地域性が顕在化し、平城I式もその独自性を堅持し発展したものと捉えられる。しかし、一見すると平城I式と福田K II式の形相は異なったものに見えるものの諸属性を観察する限り、互いに親縁関係にあったものと考えられる。九州については平城I式の古相段階で鐘崎式と共有部分を持つものの、新相段階以後、九州では鐘崎II式一色に統合され平城II式は異系統となる様である。

【注】

- 1) 三森定男 1938 「先史時代の西部日本（下）」「人類学先史学講座 第2巻」。
- 2) 「宿毛貝塚」（1949 高知県教育委員会）で往1を受け、宿毛貝塚出土土器を沖雲A式に比定していたものの、その後、岡本健児氏は宿毛式（「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」1966）の設定を行う。
- 3) 西 健一郎 1980 「縄崎式土器について」『九州文化史研究所紀要 第25号』。
- 4) 賀川光大 1964 「所謂縄崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）」『大分県地方史 第34号』。
- 5) 木村剛朗 1982 「平城貝塚」御莊町教育委員会。
- 6) 西脇対各夫 1990 「伊木力遺跡」、伊木力遺跡出土の平城I式とされる土器片については、実見していないものの、拓本からして橋状把手の「複条沈線」とされるものは、平城I式の新和段階に観られる口縁部に施される延辺縫（弧線文）が、ただ単に付加されたものであり、平城II式の頭部に観られる「複条沈線」とは全く別物であろう。

【参考文献】

- 寺石正路 1891 「四国島貝塚ノ發見」「東京人類学雑誌 67」。
- 大野雲外 1917 「四国九州先住民遺跡」「東京人類学雑誌 32-2」。
- 沢田秀穂 1936 「宿毛貝塚の管見」「土佐史談 57」。
- 三森定男 1938 「先史時代の西日本（下）」「人類学・先史学講座 第2巻」。
- 池淵須藤樹 1950 「岡山県児島郡瀬崎町彦坂貝塚調査報告」。
- 安岡源一・酒詠仲男・岡本健児 1951 「宿毛貝塚」高知県教育委員会。
- 讃木義昌・西田栄 1957 「伊豫平城貝塚—縄文土器を中心として」愛媛県御莊町教育委員会。
- 湖見浩 1960 「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」「紀要 第18号」広島大学。
- 賀川光夫 1964 「所謂縄崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）」「大分県地方史 第34号」。
- 岡本健児 1966 「宿毛貝塚出土縄文式土器の再検討」「研究誌 5号」高知小津高校。
- 賀川光夫・橋 昌信 1967 「小池原貝塚」「大分県文化財調査報告 第13輯」大分県教育委員会。
- 湖見浩 1968 「月崎遺跡」「宇都の遺跡」宇都市教育委員会。
- 乙益重隆・前川義洋 1969 「縄文後期文化九州」「新版考古学講座 3」雄山閣。
- 水井昌文・前川義洋・橋口達也 1972 「山鹿貝塚」芦屋町教育委員会。
- 下村克彦 1973 「称各寺式土器の意匠之懸念」「墳丘考古学 第11号」。
- 柿沼修平 1973 「いわゆる「称各寺式土器」に関する二・三の疑義」「史館 刊行号」。
- 賀川光夫・橋 昌信 1974 「コウゴー松遺跡調査報告」久住町教育委員会。
- 山下勝年 1975 「愛知県南知多町内浜林・峰其塚試掘概報」「古代学研究 77」古代學研究會。
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗 1975 「高知県土器相遺跡」高知県教育委員会。
- 渡辺誠 1975 「桑飼下遺跡発掘調査報告」高鶴市教育委員会。
- 中村友博 1976 「堀手遺跡 2」「東大阪市遺跡保護調査会」。
- 小部隆 1976 「洗谷貝塚」福山市教育委員会。
- 橋田庫秋 1977 「宿毛市史、宿毛市」。
- 今村啓爾 1977 「称各寺式土器の研究（上）」「考古学雑誌 第63卷第1号」日本考古学会。
- 今村啓爾 1977 「称各寺式土器の研究（下）」「考古学雑誌 第63卷第2号」日本考古学会。
- 吉木秀雄 1977 「称各寺式土器の再検討」「墳丘考古学 第16号」。
- 大庭徹大 1978 「岩谷遺跡」「愛媛県庁」。
- 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗 1978 「三里遺跡」高知県中村市教育委員会。
- 止林謙・安楽勉 1980 「白浜貝塚」福江市教育委員会。
- 西 健一郎 1980 「縄崎式土器について」『九州文化史研究所紀要 第25号』。
- 今橋浩一 1980 「塚之内式土器について」「大田区史（資料編）考古 II」大田区。
- 渡辺昌宏 1980 「淡輪遺跡発掘調査概要・III」「大阪府教育委員会」。
- 田中良之・松永幸男 1981 「荻谷地の遺跡VI」「荻町教育委員会」。
- 松田真一 1981 「山添村広瀬遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」第一回 奈良県立橿原考古学研究所。
- 東 拓良 1981 「近畿地方の土器」「縄文文化の研究 4」雄山閣。
- 中島庄一 1981 「土器文様の変化・称各寺式土器を中心として」「神奈川考古 12号」神奈川考古同人会。
- 橋 昌信 1981 「黒崎貝塚」黒崎貝塚調査会。

- 木村剛朗 1982 「平城貝塚」愛媛県御荘町教育委員会
木村剛朗 1983 「土佐における後期繩文文化について」「『高知の研究』1」清文堂
市立市川考古博物館 1983 「シンボジウム堀之内式土器の歴史」
久保豫二郎 1983 「島遺跡発掘調査報告書 第1集」北条町教育委員会
中越利夫 1983 「帝釈隧道跡発掘調査年報 VI」広島大学
石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」「調査研究集録』港北ニュータウン埋蔵文化財調査
団
中越利夫 1984 「帝釈隧道跡発掘調査年報 VII」広島大学
田中良之・松永幸男 1984 「広域上器分布図の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」
「古文化談叢 第14集」九州古文化研究会
小川和博 1985 「堀之内2式土器の成立をめぐって」「古代 第80号」早稲田大学
柴尾俊介・佐藤浩司 1985 「下吉田遺跡」(財)北九州市教育文化事業団
工藤俊樹 1985 「右近次郎 II」大野市教育委員会
山本哲也・廣田佳久・下村公彦 1986 「宿毛貝塚発掘調査報告書」高知県教育委員会
岩崎二郎 1986 「仏龕遺跡」(財)大阪府埋蔵文化財協会
大飼徹夫 1986 「愛媛県史資料編」
泉 拓良・上田芳美 1986 「文様系統論」「季刊 考古学 第17号」雄山園
木村剛朗 1987 「四万十川流域の縄文文化研究」
久保豫二郎 1987 「森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書」東伯町教育委員会
岡 美咲子 1987 「九州における後期縄文土器について」「肥後考古 第6号」肥後考古学会
山本悦世・石坂俊郎・松岡かおり 1987 「岡山大学構内遺跡調査研究年報 5」岡山大学
坂本義弘 1988 「大分市史 上巻 大分市」
下澤公明 1988 「舟津原」「本州四国連絡陸上ルート建設に伴う発掘調査 II」岡山県教育委員会
下澤公明 1988 「阿津衆出」「本州四国連絡陸上ルート建設に伴う発掘調査 II」岡山県教育委員会
大山真亮・真鍋昌宏 1988 「大浦浜遺跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V」香川県
教育委員会
阿部芳郎 1988 「堀之内1式の土器の構成と変遷」「信濃 第40巻第4号」信濃史学会
若林 卓 1989 「岡山大学構内遺跡調査研究年報 6」岡山大学
谷岡陽一・中原 齊 1989 「東谷遺跡発掘調査報告書 I」福部村教育委員会
玉田芳美 1989 「中津・福岡KII式土器模式」「縄文土器大観 4」
泉 承良 1989 「縁帯文土器様式」「縄文土器大観 4」
千葉 豊 1989 「縁帯文系上器群の成立と展開」「史林 72巻6号」
泉 承良・松井 章 1989 「福井貝塚資料」「山内清男考古資料 2」奈良国立文化財研究所
縄文セミナーの会 1990 「第4回 縄文後期の諸問題」
水ノ江和同 1990 「土佐井地区遺跡」大平村教育委員会
千葉 豊 1990 「京都大学病院構内遺跡の調査」「京都大学埋蔵文化財調査報告 IV」京都大学埋蔵文化財研究センター
谷岡陽一・中原 齊 1990 「栗谷遺跡発掘調査報告書 III」福部村教育委員会
宮本 一夫 1990 「文京遺跡 第8・9・11次調査」愛媛大学
西脇対名夫 1990 「伊木力遺跡」多良見町教育委員会
千葉 豊 1990 「小森岡遺跡」竹野町教育委員会
植田文雄 1990 「今安寺遺跡」能登川町教育委員会
後藤一重 1990 「上野遺跡」豊後高田市教育委員会

VII おわりに

最近、高知県に於いても福田K II式と縁帶文土器を繋ぐ「中間型式」が高知県の山間部の本山町松ノ木遺跡で多量に出土したことから、高知県内の縄文研究の見直し作業が必要とされている。特に平城式、宿毛式、また三里式については「中間型式」を絡めた再検討を迫られそうである。

平城式についての最近の研究動向は纏まつたものは見られないものの、断片ながら平城I式と平城II式の先後関係の流れを逆転させた論稿、その論稿を既定概念の如く取り込んだ報告書も見受けられる。それらは西南四国に展開している地の先後型式の流れを度外視し、その方法論に合致する一部分だけを取り上げ平城式を恣意的に語ろうとしている様に思われる。

平城I式については本報告書で取り上げたように3細分される可能性が強く、従来の福田K II式に単純に後続するものではなく、古相段階では福田K II式にまで通り、新相段階では福田K II式と縁帶文土器の「中間型式」に跨るものが含まれよう。

今後とも更に検討を要するものの、平城I式は数型式に跨り展開していた可能性の強いものである。そして平城II式の段階に至り、西南四国の縄文土器が本格的に縁帶文土器化するものと捉えられよう。東九州側の縄文後期前半は小池原下層式から始まり、小池原上層式、そして鐘崎式に受け継がれ発展するが、平城式はI式的段階では中津式の残影を残しながらも小池原上層式との強い相互関係にあり、II式的段階に至り小池原上層式と袂を分かち、瀬戸内の津雲A式の影響を強く受け縁帶文土器化するのではないかろうか。

宿毛式については小池原下層式との並行関係が一部認められ、また平城I式の祖型とされているものの、その後、平城式と宿毛式は独自に展開した可能性が強く、今後更に宿毛式の細分が必要かと思われる。宿毛式、平城式についても共に多くの研究課題が残されている様に思われる。

平城貝塚、宿毛貝塚は古くから知られ、また先学の地道な研究成果も甚大であるものの、その後の資料の増加は余り見られず、西南四国の縄文研究は小康といえるような状態であった。その為、最近俄かに活況を呈してきた瀬戸内と九州の縄文研究から取り残された様な感がある。西日本の縄文研究は特に福田K II式と縁帶文土器を繋ぐ「中間型式」についての論稿が多く見受けられ、その中で疎外的に西南四国の縄文を取り上げられる程度である。例えれば瀬戸内と九州側で西南四国の頭上を飛び越えて縄文研究が進展している様な状況である。しかし、瀬戸内と九州との研究が相互に進展しているとは思われず、このことが瀬戸内と九州の両地域の影響を受け、また影響を与えたであろう西南四国の縄文研究を複雑化し、更に困難にしている様に思われる。逆に「中四国および九州の接点」である西南四国の研究が進むことにより、中四国、九州の縄文研究を繋ぐ糸口が残されていることも確かである。

〈付編〉 ムクリ山遺跡

はじめに

ムクリ山遺跡が発見されたのは、第2次世界大戦後のことである。遺跡を発見されたのは当時の開拓農家の入植の人達で、その人達のなかで遺跡から土器や石器が出土することを世に知らしめたのは、幡多郡大月町竜ヶ迫1528の25在住の武田源春氏であった。その後、この遺跡の発見は、幡多の郷土史研究家橋田庫欣氏の知るところとなり、後にこの遺跡が縄文時代前期と弥生時代中期の遺跡であることが明らかになり、昭和48(1973)年には、発掘調査が実施された。

発掘調査は、岡本健児氏らにより2月21日から3月2日まで行われた。なお、この調査は、当時山口大学の教授であった小野忠熙氏を中心とする文部省科学研究助成金総合研究(A)「弥生系高地性集落址の研究」の「南四国・高知県・徳島県・愛媛県の弥生系高地性集落址の調査研究」の学術調査の一環である。

発掘調査当時は、この地に入植した人々は土地をさり、遺跡所在地は、雑木林に覆われていた。これを発掘調査のために、車が通るように道路を改修され、調査團を毎日送り迎えされたのは、町当局の(柴岡喜吉町長・松田正穂教育長・増田千秋教育次長・岡田和躬社会教育主事)方々であった。そして、武田源春氏は所有の雑木林を伐採され発掘調査に協力されている。

当時発掘調査に参加されたのは、故廣田典夫県文化財専門委員、高知大学学生であった丸山和男・中井和也・蓮薫慎一・片山雅文の各氏、所有者の武田源春氏と一族の方々、そして当時の大月町教育委員会の岡田和躬・酒井通雄・登手正各主事、大月町中央公民館安田泰助館長の方々である。

なお、このムクリ山遺跡の報告は、小野忠熙編『高地性集落址の研究』資料編一の岡本健児「1 高知県ムクリ山遺跡」(昭和54年3月、辨学生社)の報告をもとに記述したものである。

1 遺跡の位置

ムクリ山遺跡は、大月町の竜ヶ迫ムクリ山1913の標高250～260mに位置している。このムクリ山は、竜ヶ迫集落の南にある山で標高は295.4m、山頂は硬質砂岩の岩場で、ここは、第2次世界大戦の時に、防空監視所があったところもある。この山頂からは、宿毛湾が眼下に見おろせ、豊後水道をへて九州まで遠望できる。

遺跡は、山頂から尾根づたいに距離にして300m下った尾根上と豊後水道に面する緩やかな斜面に位置している。遺跡の標高は250mから260mである。発掘調査地点は、ムクリ山頂につづく傾斜面上部の稜線上である。

2 調査方法と層位(第1図)

調査地区を決定後、樹木を伐採、調査区に2mグリッドを18区設定、遺構の確認を実施した。

層位は、Z-2地区西角からC-2区の中央部まで、第1層は、黒色腐植土層で4～9cmの深さ

で、多くの土器片を含んでいる。第2層は、音地層混じりの黒色土層で遺物包含層で、堆積は10~19cmである。第3層は、音地層でこれら堆積土内には、岩石の露出がみられ、岩石の石質は硬質砂岩・頁岩・粘板岩などである。なお、第3層以下は、礫層である。

3 遺構(第2図)

検出された遺構は、平地住居跡1軒と溝跡1条である。

住居跡の規模は、南北5.15m、東西4.84mである。住居跡床は、現地表面より22~23cmと浅い。炉跡は、住居跡の西部に位置し、炉跡全体に炭が認められた。柱穴跡は、本住居跡では確認できなかった。住居跡内には、A~Dの平坦な石が認められ、各4つの石が柱の基部をうけたものと考えられ、礫板の可能性がある。

次に住居跡の側壁であるが、壁面は確認されておらず、壁面の位置する部分に大小の自然石が認められ、これがほぼ円形を呈した状態で配置されている。かかる状況より自然石が壁面の一部を形成していたことが考えられる。また、住居跡内には自然石が一部散乱した状況を呈しているが、壁面に用いられたものが廃絶後に移動したことが推定される。

これらの自然石は、壁面を形作ったもの一部と考えられ、側壁としては羽目板を住居内外に配し、中に側石を置き土砂により壁面を形成させていたものと推定される。

溝跡は、住居跡の西南に位置し、幅は80cm、深さ約18.7cmの排水溝である。

4 遺物

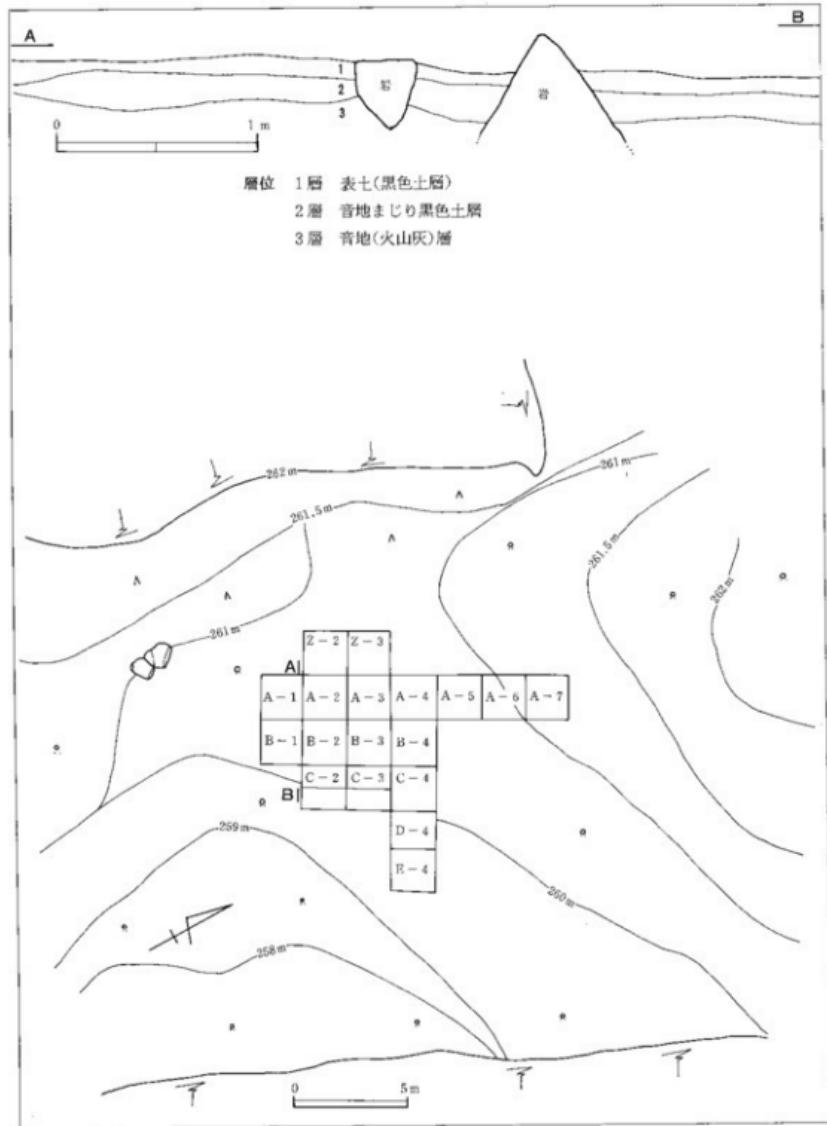
出土遺物は石器と土器に分類される。これらの遺物は、調査時出土のもの、表面採集、戦後に表採されたものをみてみると縄文時代前期と弥生時代中期の遺物に大別できる。

住居跡床面からは、第2図中の住居跡内に付してある番号の遺物が検出された。

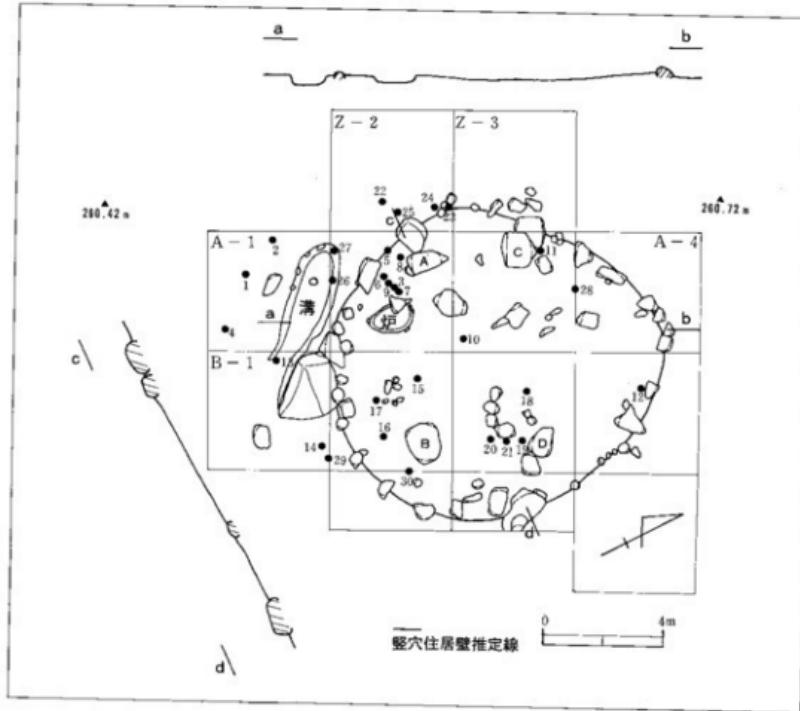
炉跡周辺よりは、3・5~9の土器片、10・11・12・15・17・18・19・20・24・28・30の土器片が検出されている。

16は、石器剥片と石器原石、19はスクレイバー様石器、21は石器原石、23は砥石である。排水溝よりは、27・26・13の土器片が検出されている。

住居跡周辺よりは、1・2・4・14・25・29の土器片、22の姫島産黒曜石が検出されている。



第1図 ムクリ山遺跡土層断面・発掘区周辺図



第2図 ムクリ山遺跡住居跡

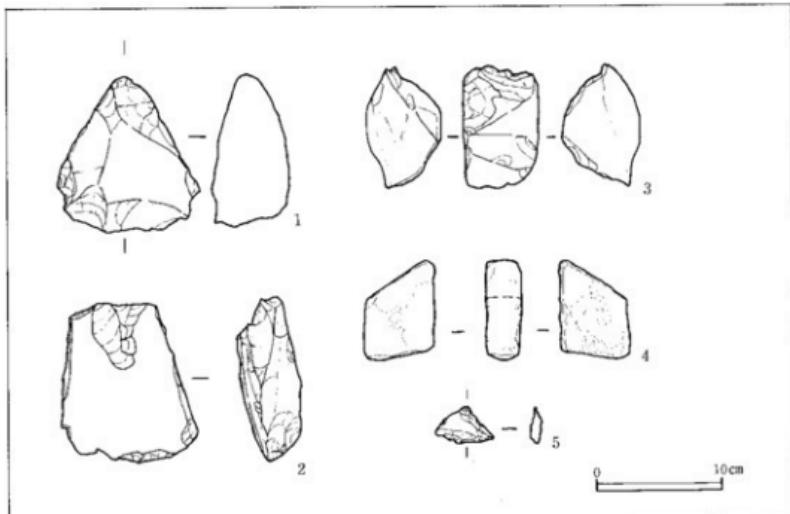
石器（第3図1～5）

1・2は、住居跡床面より出土したもので、1は砂岩製の石核である。2は、粘板岩製の石核で片面は自然而残し、片面は剥離痕が認められる。ともに剥片で石錐を作ったものと考えられる。

3・4は砥石で3は、C-3区の住居跡より検出されたものであるが、床面より上部で検出された。硬質砂岩製砥石で3面に使用痕が認められる。4は砂岩製の砥石で、手持ち用の砥石と考えられ、広い両面の部分には一面に叩打痕が残っている。これらの砥石は、金属器の砥石として使用されたものと思われる。

5はスクレイパー様の石器で、住居跡内で検出されたもので神西式土器に伴って出土した。この時期に伴うものとしては珍しいものである。

姫島産の黒曜石が、住居跡外と住居跡内（Z-3区）の床面より高い包含層にて、剥片が検出されているが、黒曜石が神西式土器に伴うものかは不明である。



第3図 ムクリ山遺跡出土石器

なお、当地からは縄文時代の姫島産黒曜石の打製石鎌、チャートの打製石鎌が発見されており、さらに轟式土器片が検出されていることから、姫島産黒曜石はこれらの土器に伴うものと推定される。

他の石器として、円形礫を材とした叩石が開墾時に検出されており、これらは神西式土器に伴うものと考えられる。

土器（第4図）

ムクリ山遺跡から出土する土器は、縄文土器と弥生土器であるが、今回の調査では、弥生土器のみで縄文時代前期の轟式土器は検出されていない。土器については、今回の調査で検出されたものとかつて表採されたものに分けて記述する。

表採土器（37・38）

終戦後の開墾時には本検出住居跡と同様の遺構から出土したものと言われているものである。3～4条の櫛描平行線と波状文の組み合せをもつものである。畿内第Ⅲ様式一新一に併行するもので、南国市田村遺跡群の北カリヤ遺跡を標準遺跡とする北カリヤ式土器である。

遺構外出土の土器（17）

17は、Z-2区の表土層より出土した土器である。口縁は外反し、口縁端は粘土紐を貼付し、口縁下端は下に垂れるもので、この地域の中前期初頭から中葉にかけてみられる壺形土器の口縁と同様

の特徴を示している。口縁端は、櫛目施文具による刺突文がみられ、頸部はせまく胸部は張り、胸上部には2~4本の櫛描直線と波状文の文様が組み合わされている。胎七は、黒褐色をなし、外面には斜行の刷毛目がつけられ、口縁にちかい内面は研磨されている。この土器も上記の北カリヤ式土器に分類できるものである。

遺構出土の土器（1~36、39~55）

壺形土器（1~16、18~31）

壺形土器は、器形により3類に分類できる。1類は、口縁外面が粘土帶により厚くなっているものである。1~5、7~14・16・18・19の土器口縁がこれに該当するものである。この1類は、頸部がややせばまり、頸部から胸部に移行するところにへら描の刺突列点文をもつもので、18・20・28~30がそれである。この列点文が2段になったもの（31）もあり、口縁の下につけられたもの（13）もある。また腹胸部に1本の沈線を描き、それに列点文を入れたものもある。口縁下に円形貼付文をもつもの（19）、頸部から胸部に移行する部分に円形の貼付文をもつもの（25）もある。この1類で壺形のもので口縁の小さいものは、胸部は張らず卵形をなすものが多い。本遺跡出土の1類は胸部が卵形をなすものと推定される。底部は、平底で器形の割に小さいものが多い。

2類は、口縁に粘土帶をもたず文様の少ない壺形土器（6）で、胸部は卵形と考えられる。

3類は、全体に少なく、（15）のみである。口縁は大きく外反する。この類は、1、2類より大きく胸部が張り、球形に近い形で上胸部に数条の平行に突帯をもつ、突帯に少な点文をもつもの（21・26・27）もある。

甕形土器（32~35）

口縁は外反し、頸部がやや緩やかに「く」の字状に曲がり、胸部のやや張るものである。文様は無文である。36は胸部下部に横走する叩目文がみられる。33は、指頭を使い口縁を厚くし、34は内面にすすの付着がみられる。

5 総 括

1) 遺跡の機能した時期

ムクリ山遺跡から検出された弥生土器は、遺構外から第3様式一新一にあたる北カリヤ式土器と住居跡から第4様式の神西式土器である。

南四国における第3様式一新一の土器様式については、南四国を東部と西部にわけずに北カリヤ式土器で一応統一されていたが⁽¹⁾、最近中村市入田遺跡・宿毛市山奈町芳奈遺跡で発見された資料のなかに、口縁部に凹線文をもつ土器が西部にもみられることが明らかになっている。また、口縁部に凹線文をもつ形態の土器ではあるが、凹線文にかわりへら描斜線文をもつものがあり、ムクリ山遺跡で検出されたような壺形土器が存在することが明らかになりつつある。南四国東部の南国市田村遺跡群の北カリヤ遺跡を標準遺跡とする北カリヤ式土器とはやや異なった様相をしめして

いる。現段階では、北カリヤ式土器の名称でこの一群の土器も呼称しておく。

第4様式の神西式土器は、南四国中央部の神西式土器^④と比較すると櫛描直線文や棒状浮文や突帯などが全体に少なく、凹線文の発達した南四国の壺形土器を含まない。器形は、小形の壺形土器が多い。

本遺跡出土の土器の特色は、文様が少なく、凹線文の発達した壺形土器がないことで、かかる状況は、本遺跡が神西式土器の最西端である地理的な状況から解釈できるものである。

また、検出された土器のなかに神西式土器の高环が存していないことは、凹線文をもつ龍河洞式土器の高环が南四国西部までみられることと関係があると考えられる。

ムクリ山遺跡で検出された土器の胎土は、他の遺跡の土器の胎土と異なり、非常に軟らかく胎土中に遺跡付近にみられる堆積土である音地層中に認められるガラス質の粒子が含まれている。神西式土器の胎土に音地層に含まれる粒子を混入したものではなく、このことは本遺跡で使われた土器が低地の遺跡より搬入したものではなく、このムクリ山遺跡の周辺で焼成されたものであるとの可能性を示すものである。

かかる状況より、ムクリ山遺跡の機能した時期は、弥生時代中期後半から神西式土器をもつ弥生時代中期末までと考えられる。北カリヤ式土器が開墾時および調査で検出されていることを考慮すると、かつて開墾時に発見された住居跡は、可能性として北カリヤ式土器のみをもつ住居跡か、或は北カリヤ式土器と神西式土器の両者をもつ住居跡の可能性がある。

2) 遺跡の性格

ムクリ山遺跡は、標高 260 m 前後の位置に立地する。南四国における弥生の遺跡で標高・比高の高い遺跡は、標高 700 m にある本川村の鷹ノ巣山遺跡である。第2の標高・比高をもつ遺跡は、野市町龍河洞スカイラインの笹ヶ峰遺跡である。標高は 280 m、比高は 180 m である。

ムクリ山遺跡・笹ヶ峰遺跡に共通していることは、ともに眺望が良好で特に海岸部がみわたせることである。本遺跡は先に記述したように、ムクリ山の山頂からは宿毛湾が眺望でき、さらに愛媛県の海岸部、晴天時には九州まで遠望することができる。かかる状況は、瀬戸内で多く報告されている弥生系高地性集落跡と立地条件が同じであり、遺跡の性格も同じものと考えられる。

次に、本遺跡の稲作について考えてみたい。現在、この地には遺跡の東南 50 m に湧水を利用した開墾時に作られた水田があるが、現状でみる限りでは相当無理をして開墾されたものと考えられ、弥生時代における稲作は、不可能であったと考えられる。さらに、当地は土層堆積のところで触れているように、九州に近いという条件のもとで火山灰がかなり堆積しており、また山自体にも岩が露頭しており、弥生人にとって畑作も不適切であったと思われる。

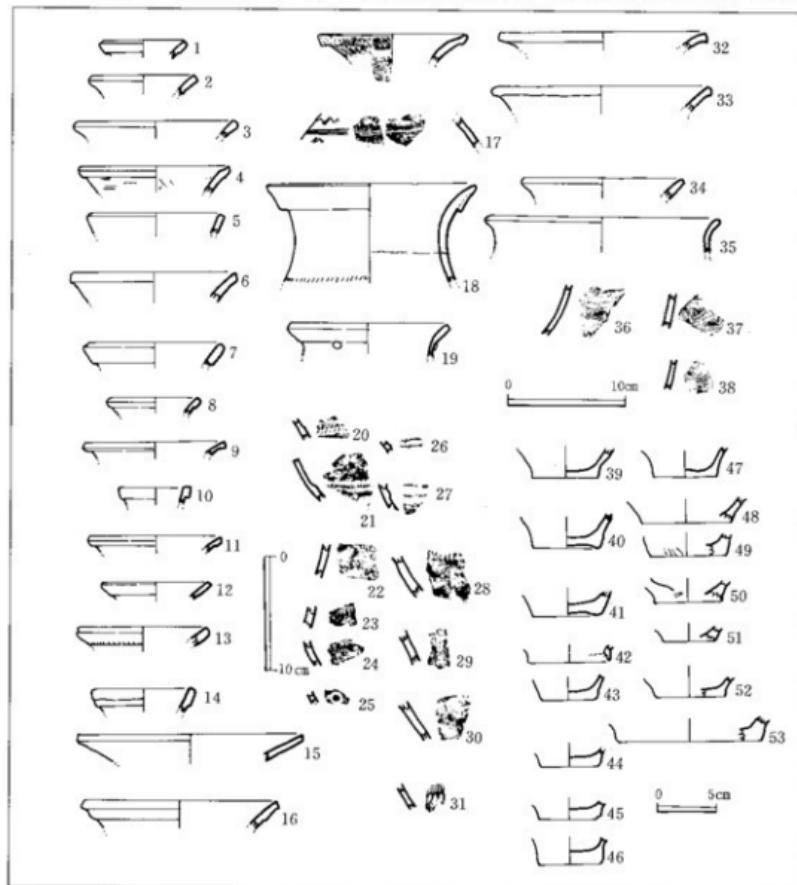
このように考えてみると、立地条件などが愛媛県八堂遺跡や山口県吹越遺跡などと類似しており、瀬戸内に分布する弥生系の高地性集落と同様の機能をはたす軍事的、防衛的な集落で見張り台的な性格をもつ集落であることが考えられるのである。

ただ検出遺物よりそれを証明する遺物が発見されていないのは、残念ではあるが、神西式土器の使用された時期は、鉄鏃の使用がかなりあったことを示す遺物が検出されている。さらに本遺跡では石鏃は未検出であるが、硬質砂岩剥片・石核が遺構内から検出されていることから石鏃の使用はあったと考えられる。また、ムクリ山遺跡の東南に位置する標高 200 m の神西式土器を出土する土佐清水市唐人駄場遺跡からは、大形石鏃の存在が確認されており、本遺跡も石鏃が皆無であるとは考えられないである。

(岡本 桂典)

註(1) 岡本健児「弥生土器一四国一」(『考古学ジャーナル』92 1974 東京)

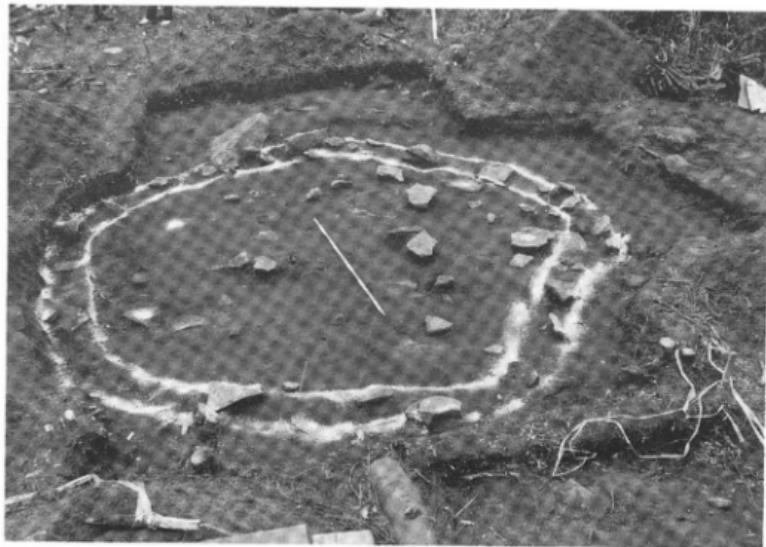
註(2) 岡本健児「神西式土器文化の再検討」(『高知女子大学紀要人文・社会科学編』第20巻 1972 高知)



第4図 ムクリ山遺跡出土土器

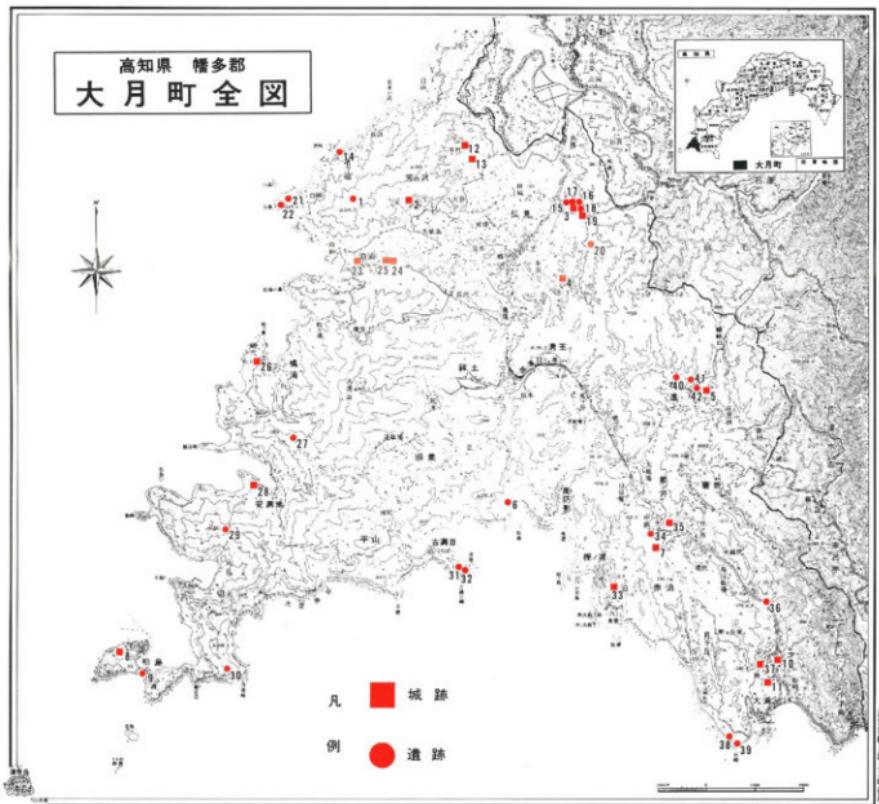


調査区全景



住居跡

番号	名 称	番号	名 称	番号	名 称	番号	名 称
1	ムクリ山遺跡	12	正 城 跡	23	古 泊 城 跡	34	延 福 寺 跡
2	内 平 城 跡	13	芳 ノ 沢 城 跡	24	泊 浦 城 跡	35	爱 石 城 跡
3	慈 ノ 川 城 跡	14	鬼 ケ 避 道 跡	25	西 泊 浦 城 跡	36	カルカモ遺跡
4	弘 見 城 跡	15	慈 ノ 川 反 西 通 道	26	橘 滝 城 跡	37	西 ノ 地 域 跡
5	春 寶 城 跡	16	美 ノ 月 申 道 道 道	27	橘 滝 火 立 場	38	大 潤 火 立 場
6	灰 壱 道 跡	17	依 調 一 族 の 墓	28	安 满 地 城 道	39	大 潤 硼 台 道
7	姫 ノ 井 城 跡	18	依 囲 左 京 墓	29	安 满 地 火 立 場	40	八 反 地 道 跡
8	若 日 月 城 跡 (松島城跡)	19	御 村 (近森ノ川) 墓群	30	大 堂 火 立 場 道	41	エ ノ 木 谷 道 跡
9	柏 島 石 堤	20	依 囲 右 京 墓	31	古 满 目 硼 台 道	42	神 ノ 木 道 跡
10	北 才 角 城 跡	21	白崎の火立場跡	32	古 满 目 火 立 場 道		
11	才 角 城 跡	22	白崎 硼 台 道	33	西 泊 城 跡		



大月町遺跡分布図

◇高知県大月町埋蔵文化財調査報告書第1集

尻貝遺跡

◇発行日 1991年3月3日

◇編集・発行 大月町教育委員会

高知県大月町弘見2230

☎ 0880-73-1111

◇印 刷 有限会社 宿毛印刷